
あの頃には戻れない

Spis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃には戻れない

【NZコード】

N5139M

【作者名】

S p.i s

【あらすじ】

愛する人が突然に死んだ。

『桐乃 綾』は幼馴染みである『緒方 春哉』に恋をしていたが、自他共に認める奥手な性格から告白する勇気がなかった。変わらないと思っていた関係、隣でずっと見守り続けてくれると思っていた彼は、突然交通事故で死んでしまう。それも自分の目の前、腕の中で。

悲しみに暮れ自暴自棄になっていたある日、綾は謎の少女から一つ

の携帯電話を授かる。

「あなたは全てを擲つてでもその恋を取り戻す覚悟はある?」

それは 過去を、未来をも変える不思議な携帯電話だった……。

初恋を追いかける少女と、生きる意味を問い合わせ続ける少年、そして二人を取り巻く少年少女たちの恋物語。

プロローグ

恋は限りない方法で私たちを喜ばせる。ただし、私たちから平安を奪い去るところのことをのぞけば。

ジョン・ドライデン

あなたは、誰かを愛したことはありますか？

猛烈に、ただどうしようもない衝動、恋を感じたことはありますか？

心の底から愛する人のために、自分の全てを擲つてでも欲したことはありますか？

その恋のために、他人の人生ですらもその牙にかけても厭わないと考えたことはありますか？

ある日 私は気づいた。

自分の心の奥底に眠る、いや、眠り燻っていた感情が浮き上がりてくるのを。

それは、まさしく恋。

朝起きて一番最初に思い浮かぶ人の顔は親ではなく彼。登校している最中に不意に探してしまった姿は彼。

授業中、黒板よりも集中して見つめてしまつるのは彼の背。

体育の授業、特に目立つてもいないシーンでも輝いて見えてしまつのは彼の姿だけ。

「好き」

その一言を伝えられない相手はただ一人、彼だけ。 他は友情での好き、家族として好き、私に関わる人々に、ほんの少し勇気を出せば言える親しみを表す言葉のはずなのに。

それは、言つてしまえば何かが壊れる気がしてしまう魔法の言葉。私は不器用だし、奥手だし、とても引っ込み思案。だから、きっと、この恋が実らなかつたら元の関係には戻れない。ずっと長い間、私は彼を見続けてきた。親友、幼馴染みとして彼との距離を優待されてきた。

その関係が、その一言で全て失つてしまふかも知れない。臆病な私には、決して言つことのできない言葉だった。でも、私は今、言えなかつたことを死ぬほど後悔している。言つべきだった。

言わなければならなかつた。

どんなに辛い思いをしたとしても、言つべきだった。たとえ実らない恋だったとしても、彼を完全に失うわけではないのだから。

でももう遅い。

全ては過ぎてしまつたことだ。

私の犯した過ちは、この後の人生ずっと背負つていかなくてはならない。

どれだけ長い時間苦しまなくてはならないのだろう。

あの日 。

彼は私の腕の中で息を引き取つた。

私にとつて一度と忘れられない日になることは、間違いない。

人生最悪の出来事だった。

プロローグ（後書き）

自身2作目となる本作ですが、今回は恋愛を全面に押し出した作品になると思います。

私の作風であるシリアルスは抜けきらないとは思いますが、なるべく軽く、そして甘い恋愛模様を描けたらいいなと思っております。更新はいつもごとく遅くなるとは思いますが、よろしければ最後までお付き合いくだりませ。よろしくお願ひします。

第一話 私たちが壊れるまで（上）

サマーと心地良くそよぐ風に、私は身を任せていた。

風は、私の腰までかかる長い黒髪をなびかせ、制服のリボンを忙しく踊らせる。まるで犬の尻尾のようにぱたぱたと動きまわるリボンを左手で抑え、そのまま胸に添えた。

左手から感じる微かな振動。私が生きている証。けれどその鼓動は、生きるだけにしては早過ぎる。私の鼓動もまた、踊っているのだ。

「遅いな……」

私の瞳はただ一点だけを見つめ、決して動こうとはしない。自分の意思が介在していないのか、むしろ生理的行為をも受け付けないのか、瞬きすらも躊躇つているように思えるくらいだ。

私が見つめる先には、古びた石造りの数えて48段の階段。所々が老朽化でコンクリートが崩れ、ただでさえ急で足場の少ない一段一段を更に歩みにくくしている。真ん中を通る一本の鉄手すりは、最早素手では触りたくないほど汚らしく錆びこけていた。

その階段は、本当の意味で私の一日が始まる場所。私の視界にたつた一つの影が現れるだけで、世界は激変するのだ。

華やかな世界に導くその影は、いつもきつちり予定の時間に現れる。けれど、その予定の時間まで待ちきれない私は、「遅いな」と呴くことが常だ。

48段の階段のてっぺんをひたすらに見つめ溜息をつく。私は自分の目が痛くなってしまったことに呆れたのだ。まったく、自分勝手極まりないと思いつつもため息が漏れてしまつのは仕方がない。

目が痛くなつてしまつのも当たり前だ。48段目のちょうど真上には、この世界の生命とも呼べる存在がその姿を惜しげもなく示し

ているからだ。そう、太陽。

西を向いて傾斜しているこの階段は、その頂にちょうど太陽が乗るような形で私に朝を知らせてくれる。おかげでこの階段を常に見続けることは困難極まりない。けれど、目を離すわけにもいかない。毎朝自分の目を虐める難儀な日課から始まるのだ。

瞬間、その光が遮られる。

その人は私にとつて世界の生命とも呼べる存在。太陽ではない。太陽は最早彼を輝かせるためのオプションでしかない。

太陽の光を遮るその人は、私の体をすっぽりと覆い尽くすほど大きな影を作る。

私の目は太陽光の焼き付きでその姿を明確に捉えることができない。それが本当に悔やまれた。けれど、おぼろげに見える光を背にしたその姿は、まるで太陽すらも手中に収めた太陽神のような神々しさを放っていた。

「おはよ。今日も早いな」

その人は、柔らかく温かい声音で私に呼びかけてくれる。それがとても嬉しかつた。この声を朝一に聞くことが私の生きがいである。やがて駆け足で急な階段を駆け下りてくるその人の姿を、回復しつつある視界でひたすらに追つた。学校指定の革鞄を肩にかけ、慣れたように軽いステップで最後の段、いや、最後の数段を飛び降りた彼、『緒方 春哉』 ハルくんが私の横に並んだ。

邪魔にならない程度に伸ばされピヨンと跳ねたくせ毛の黒髪、そこに収まる幼さを残しつつも、どこか大人びた印象すらも受ける顔は、私にとつてまさに芸術。真っ黒で少し小さめの瞳は、優しさと意志の強さを伺わせる。一見、スラリと痩せた印象を持たせる体格だが、以前上裸の彼を見たときはその筋肉の凄さに驚いた。

とまあ、えらく私は彼を褒めているが、実際のところ容姿だけで言えば一般的な少年である。

「うふ、おはよー」

いつも私はそれ以上何を言つていいかわからず、言葉少なに答えるだけになつてしまつ。それでも彼は特に気にしたような顔はしない。ただにっこりと笑顔で返してくれるだけだ。

「今日つて体育あつたつけ?」

ハルくんは私が肩に下げている体操着袋を見てそう言つた。

「ううん、明日だけど……私忘れちゃうかもしれないから」

「ああ、そつか。俺もそつすりやよかつたかなあ」

「ハルくんはあつと忘れないよ」

私がそう言つと、彼は満面の笑みで「そつか」と答えてくれた。彼は与えられた評価に絶対謙遜しない。彼曰く、「褒めてくれた人に悪い」だそうだ。

褒め言葉にありがとうで返す、ごく当たり前に見えてみんなその一線を超えない。少しでも返しを誤れば自分に酔つていると思われるかもしれない。そう思つてゐるのは私だけだろうか。

私たちは階段の反対方向に向かつて歩き出す。するとまたすぐに階段が現れるのだ。今度は59段。ハルくんがいつも降りてくる階段よりも11段多い。けれどこっちの階段は比較的最近作られたもので、まだ多少コンクリートの白さを残しているし、手すりもメッキがされてゐるのか全く錆びていない。

夕方になるとこの階段は夕日をその頂に乗せ、朝日とはまた別の絶景を生む。

この街はこのような階段がいくつも存在する傾斜街として有名だつた。そのあまりの傾斜の多さと街の近代化、はたまた新興住宅地

や規模の大きなビルなどの誘致の影響もあり、老人たちは決まってこの街を嫌い遠のいて行き、たちまち若者が集まり横行する『今時』の街となつた。

一時はシャツスター通りなどと揶揄され、人足の遠のいていた商店街も今では若者をターゲットにしたショッピングモールとなり賑わいをみせている。私たちはその真新しいショッピングモールのゲートをぐぐる。帰りは道草に丁度いい場所だが、行きは時間の関係でどこもシャツスターが降りているため閑散としている。

ショッピングモールを通りすぎると見えてくるのは片側2車線の国道線。その上をまたがるようとにかくかる歩道橋を私たちは登つていく。

そこから見える春の景色は、今でも息を呑む。

200m程も続く、一本の桜並木の直線に挟まれた遊歩道。一本一本が洗礼され、まるでそこに収まるべくして生い茂つているかのように幻想的な桜道だ。

それは私たちの通う高等学校、『市立柊ヶ丘高等学校』の関係者しか通ることの許されない花道。まるで大学のキャンパスを思わせるその堂々たる門構えに憧れて入学を希望する生徒も少なくない。私も、ハルくんもその一人だ。

もちろんその堂々たる門構えに相応しい学力レベルを要求される、市内で最もレベルの高い高校として名が通つている名門校でもある。ハルくんは兎も角、私にとって必死で勉強してやつとつかんだ椅子だつたわけだが、2年経つた今でも壮絶な椅子取り合戦に勝利したのは奇跡だったのではないかと疑うほどだ。

それだけに胸をはつて登校できるし、隣にこんなにカッコいい幼馴染みがいるだなんて私は幸せものだなと毎日思う。……カッコよく映つているのは私の目だけなのかもしれないが。

「今日もすつごい景色だな」

「見頃は今週末までだつて言つてたよ

「へえ。じゃあ散らないうち……うーんと、土曜日でも花見に行くか！」

「ホント？ 一人で？」

私があまりにも『一人』ということを強調しそぎたのか、少しだけ頭をかしげたハルくんだったが、何か思い立つたように首を縦に振つて眼下に広がる桜を眺めつつ答えた。

「いいよ、一人きりでいいの」

私が隣で歓喜している間も、彼は桜から目を話すことはなかつた。桜から目を離さないのではなく、恥ずかしくて私から顔を背けているのではないか。そんな予感が私を更に浮き足立たせる。

だつて、ハルくんが一人きりを許すのは登下校の時だけなんだから。

きっと、きっと、今回の花見は何かがある。

私たちの関係に进展があるかもしれない。多分、私の方からどうすることもできないと思う。いつもの如く声が喉に詰まつて何も言えなくなつて終わりだ。そんなこと重々承知している。

でも今回ばかりはハルくんの方から何かあるのではないかと期待するには十分な反応だつたと言う事だ。

と、何度もそういう想像をして裏切られたことだらうか。

けれど期待せずにいられないのが乙女心というものだ。

教室まで私たちは他愛もない話に花が咲いた。基本的に上がり症で口数の少ない私だが、話し上手聞き上手のハルくんの前ではそんな私のウイークポイントも意味を成さない。常に絶える事のない話題と共通の興味が私を饒舌にさせる。もちろんハルくん以外ではそんなことがあるわけがない。親しい女友達や、家族くらいしか長い間話すことが出来ない。

「ちーつす！」

私たちに親しい挨拶をしてきた少年、『飯田 淳平』 ジュンくんは、私たちの親友であり幼馴染みの一人。

常に明るくハルくんと同じく気さくな性格で、何よりその容姿の良さも相まって女子たちからの評判は良い。まるで纖細な金糸のように美しい金髪は染め上げたそれとはわけが違う。名前だけで判断するどバリバリ日本人のような印象を持たせるが、彼はイギリス人の親を持つハーフだ。外人らしさを残す整った顔立ちとスマートかつ無駄のない身体、嫌味のない性格は女子を虜にするには十分すぎる。もちろん、私論ではなく一般論。私にしてみれば、ハルくんに勝るものなどいないのでから。

「ちーす。なあなあ！ 昨日のドタチャンみたか！？」

「ああ、あれは面白かつたな。基本ギャグは興味ないんだけど、ハルのメールで見始めたらぶつ通しけ」

一人はやたら楽しそうに昨日の10時に放送されていたお笑い番組の話で盛り上がり始めた。当然私もハルくんから「面白い番組やつてるから見てみろよ！」とのメールが来て、毎週見ているお気に入りのドラマをほつたらかして食い入るように見入った。もちろん、面白いだけではドラマを捨てたりはしない。ハルくんとの共通の話題を持つためのほうが比重は大きかつたからこそだ。

おかげで登校中のこの話題にはすべてついていけたし、何より楽しい会話が出来た。それだけで、もうお気に入りのドラマのことなどどうでもよくなっていた。

「みんなつ、おはよー！ 何、何の話？」

甲高い元気な女の子の声、その声もどこか親しみがある。彼女、

『河野 由紀子』 ユキも、もちろん私たちの親友であり、幼馴染みだ。ハルくんとの付き合いは私のほうが早いが、彼女も付き合いは長い。

真っ黒でつやつやのロングヘアを後頭部で束ね、馬の尻尾のように垂らしている。いわゆるポニー・テールだ。その美しいなめらかな髪を束ねる、可愛らしい猫のマスクコットが取り付けられた赤いリボンのシュシュは私たちお気に入り小物店の掘り出し物。私とは正反対の快活な性格で、ズバズバと物を言う我が道を行く少女だ。けれど、我侭というわけではなく一步手前で踏みとどまるの出来るどうにも憎めない可愛らしさをもつ女の子だつた。

私はそんなユキに憧れていた。少しでも私にユキの勇気があれば、もしかしたら私もユキのように そこで私は思考を振り払つた。

「昨日のドタチャンの話、ユキも見たろ？」

「見た見た！ やばかつたよねえあれ！ 特にヨッシがさあ

「そうそう！」

楽しそうに会話する私たち4人は、全員小学校のころからの幼馴染み。喧嘩ひとつしたことのない、仲良し4人組として私たちは高校に来ても少しばかり有名人だつた。常に4人で行動する私たちは、特定の距離を置きたがる微妙な年頃の高校生にしてみれば異色の存在だったのかもしれない。けれど私たちはそれを意識したことがない。

巡る季節、繰り返される毎日、私たちは4人、ただの一人も欠かさず笑いあつていた。

そんな関係が、ずっと続くと思ってやまなかつた高校2年の春 それは少しだけど変わりつつあつた。

男と女。距離の近すぎる4人が互いを意識しないはずがなかつたのだ。少なくとも4人の中の3人は恋という病を知つた。残る一人、ハルくんを除いて。

有り余る魅力を持つジュンくんを女子たちが見逃すはずはないし、また、女子の私が見ても可愛いと思うユキだって健全な男子ならば放つてはおかないだろう。でもどうして一人はそのような色沙汰に巻き込まれないか。それは簡単な理由だ。

『二人は今年の春から付き合い始めた』のだ。

私はその事実に驚きを隠せなかつた。付き合い始めたとユキから聞いたときは丸々一分思考が停止したくらいだ。私が驚いたのは何もまさか幼馴染みからカップルが出来たということではない。むしろ私は『ユキがジュンと付き合つた』という事に驚愕したのだ。私はてつくり、ユキはハルくんのことが好きなものとばかり思つていた。それはそうだ、常に一緒に居たがつたのはジュンくんではなくてハルくんのほうだつたし、いつもユキが甘えるのはハルくんだから。

一人が付き合い始めたことを私とハルくんは祝福したが、どうにも私は腑に落ちなかつた。祝福されるジュンはとても満足そうで、嬉し恥ずかしそうに笑つていたが、ユキの笑顔にそれはなかつたと感じてならなかつた。もちろん、ユキとハルくんが付き合うことになつてしまつよりは100倍マシだつたけれど。

そういうわけで、数年間続いた4人で登下校するという暗黙の約束は、1ヶ月前に音もなく静かに消え去つた。

一人が離れがちになつた微妙な空気の中でも、ハルくんは常に私たちを気遣うように立ち振る舞い、そのリーダーシップを遺憾なく発揮していくくれたおかげで、とりあえず目に見えてギクシャクすることとはなかつた。当然、突然4人で登下校をやめた私たちを訝しむ生徒たちや、どうしたのかと心配してくれる心優しい友人たちもいたが、ハルくんは包み隠さず彼らに事情を話した。

訝然としない私をよそに、どうやら一人はうまく行つているようで、たまにデートの話になつたりすることもある。普通ならあまり雰囲気のよくなる話とはいえないが、そこは私たちの長年の付き合いがカバーしてくれたし、時々入るハルくんのフォローが、そんな

話題も私たちを楽しませてくれた。

今のところ、何の問題もなく私たちは変わりつつある日常に慣れ始めてきていた。

でもそれは、私たちが幼馴染みだったからという理由ではない。影で私たち3人を支えるハルくんの存在があつてこそその平安であったことは言うまでもない。

昔から私たち4人は対等な関係であつたが、中でもハルくんの発言や行動には誰一人として逆らうものはいなかつた。もちろん、嫌だと思えば私を除いた2人はその気持ちを押さえ込まず正直に言つただろう。私は、ハルくんにならどんな命令でも背く事はなかつたろうが……。

兎に角、ハルくんは仲良し幼馴染み4人組のリーダーとして暗に認められていた。決して成績が良いと言つ訳ではない彼だが、生活においての瞬時の判断や行動力は現代の孔明と私たちが評すだけの能力を持つている。

ハルくんは成績も特に優れているわけでもないし、運動神経も平均より少し高めというだけで大したことはない。容姿だってジュン君に比べれば平凡だ。けれど、その優しさと気さくさは群を抜いているし、人を纏め上げるリーダー能力もすば抜けて高い。嫌味なくさりげなく他人を気遣える彼のその人間性を好む人は少なくなかつた。

しかしながら、人間性を重視する人間は押しが弱いと私はにらんでいる。彼と距離を縮めるにはそれなりの時間が必要だし、何より誰にでも隔てなく優しさを振りまく彼の心が自分に偏つているとどうやつたら認めることが出来ようか。それはまったく難しいことだ。それは自信を持つて私が証明する。8年の付き合いだが、未だにその境界が垣間見えない。

そんなこんなで、ハルくんの浮ついた話はとりあえず聞いたことがない。もしかしたら裏で告白とかもされたのかもしれないけれど、今のところ付き合つてるような素振りもない。一番危ないと思つて

いたユキはジユンくんと付き合い始めた。きっとこれからも、早々簡単にハルくんがとられるようなことはない、と私は高をくくっていた。

私は そんな根拠もない理由と、振り絞れない勇氣に田を背け、ハルくんに想いを告げることを済つていたのだ。

第一話 私たちが壊れるまで（上）（後書き）

意外と早く更新できました……ところが、これは誤字脱字等も含めてし
ょうが（笑）
見つけたら報告願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5139m/>

あの頃には戻れない

2010年10月8日14時14分発行